

JICA 中国事務所ニュース

(2007年5月号)

1. 最近のトピック

(1) 平成 19 年度第 1 回プロジェクト調整員会議開催

今年度第 1 回目のプロジェクト調整員会議が、5 月 25 日の午後、JICA 中国事務所で開催されました。この会議は、中国各地のプロジェクト調整員、個別専門家が一堂に会し、JICA 事務所スタッフを交えながら、円滑な事業実行に資する情報交換の場として、半年に一度開催されるものです。



なお、調整員会議の開催に併せ、当日の午前中には、難波緑技術協カアドバイザーの企画による、JICA 東京が開発した技術協カコンテンツ「市民社会支援プログラム」紹介セッションも実施されました。テレビ会議システムにより北京と東京を結んで行われたセッションには、コンテンツを開発した長畑誠氏(あい・あいネット代表)、関係 JICA スタッフ、プロジェクト調整員、外部専門家等が参加し、中国での協力事業における市民社会支援というテーマについて、紹介されたプログラムを基に、活発な意見交換がなされました。

午後の会議では、まず古賀所長より最近の JICA 事業の動向に関する講話があり、続いて事務所各担当者からの事務連絡、そして調整員等による経験交流が行われました。

プロジェクトの運営管理の中で、会計や雑多な事務に従事することの多い調整員ですが、その名の示すとおり、事業の円滑な進行を確保するため、日中双方の間に立ち、調整役としての役割を求められる局面も少なくありません。しかし、この部分の仕事は、規定やマニュアルの枠に収まるものではなく、機に応じ適切に対処することが求められます。そして、こういう一般化しにくい仕事をどうこなすかが、調整員としての力量の問われるところであり、各調整員がノウハウや経験を共有したいと考えている部分です。

このような考えに基づき、今回の調整員会議では、自由討論形式の経験交流に比較的多くの時間を充てました。討論の註では、日本人専門家チームにおける調整員の役割、日中双方の経費負担、日本人・中国人の思考の違いといった普遍的な問題から、個々のプロジェクトが業務上抱える個別の問題まで、幅広い問題提起があり、活発な意見交換が行われました。特に前者については、問題の性質上、全ての問いかけに対し明確な解決の道筋を示すことはできませんでしたが、ざっくばらんな議論を通じて、同様の問題に遭遇したとき如何に対処すべきか、その参考となる多くの収穫があったことと思います。

今回の会議で得られた成果を基に、各調整員がプロジェクトの運営においてより重要な役割を演じ、プロジェクトと JICA 事務所のより緊密な関係の構築につながることを期待しています。(四川省森林造林モデルプロジェクト/町田良太調整員)

(2) 平成 19 年度留学生無償第 1 陣 38 名が出発!

今年度の留学生無償(JDS)事業によって、日本に派遣される予定の計 38 名が、6 月 1 日(金)に日本に向けて出発しました。

今回出発したのは、9 月に入学を予定している英語でのカリキュラムに参加する皆さんであり、それぞれ中国政府や地方政府において将来の国の開発を担う要職に就いている方々です。これから、2 年間、日本の各地の大学において、それぞれが目指す研究テーマについての研究を行い、修士号取得を目指します。



出発前の 5 月 30 日(水)夜には、商務部や日本大使館からも関係者が参加して壮行会が行われました。壮行会では、各自一人ずつ、これから 2 年間にわたる日

本での生活に関する期待や抱負を述べました。また、翌5月31日(木)には、JICA事務所の職員等との意見交換会が開催されました。それぞれいくつかのグループに分かれて、実際に日本での生活面で気になる点や、各大学の校風などについてのJICA側が答えたり、逆に今の中国国内の話題について意見交換したりと、それぞれのグループごとに短い時間ながらも話題が多岐にわたっていました。

今回出発された皆さんが2年後に中国に戻ってきた後は、中国と日本との間の力強い架け橋になっていただくことが強く期待されます。

(3)「第三回皇崗小学校文化体育祭」を開催！

6月2日、天候にも恵まれた四川省涼山州昭覚県大石頭村皇崗小学校で「第三回文化体育祭」が行われました。JICAの四川省造林モデルプロジェクトの専門家とJOCV隊員が協力して、涼山州の貧困地域にある皇崗小学校において、衛生、緑化等の教育活動を開始してから、約4年の月日が経ちました。私たち(涼山州派遣JOCV)がこの小学校に通い始めてからこれまでに、生徒の衛生状態の改善、学習意欲の向上、保護者の学校、教育に対する関心も高まり、涼山州科技庁をはじめ、多くの中国側関係者の皆様より高い評価をいただきました。そして昨年に引き続き今年も子ども達の成長を父兄及び中国側関係者に見てもらおうと「第三回文化体育祭」を開催しました。



JICA 造林プロジェクト嶋崎リーダーによる開会の挨拶

当日は非常にたくさんの方々にお越しいただき、1年生～3年生計51名の生徒が繰り広げる「運動会」「合唱」「ダンス」に実際に参加、協力していただきました。開催に当たり今回私たちが特に大切にしたいことは、「小学校教諭が積極的に企画から参加できるように配慮すること」でした。この「文化体育祭」は生徒の成果発表をする機会であると同時にこの活動に協力して下さって

いる方々の結果発表の場でもあります。そして、生徒の成長を常に見守ってくださっている小学校の3名の先生が、生徒の一番の理解者であり、彼等無くしては私たちの活動は行うことができません。先生方にも積極的に参加してもらうことで「何かをやり遂げる喜び」を先生自ら感じてほしいと思っていました。

実際には企画案をまず私たちより提示し、それに対する意見をもらうことから始め、時間をかけて徐々に先生方をお願いする仕事を増やしながら、私たちがそれをサポートする形にしていきました。



一番盛り上がったのは綱引き競争

少々の意見の食い違いには、なるべく先生方の意見を尊重するようにし反省と再計画を繰り返し行いました。先生方の積極的な行動を見て生徒たちも一生懸命競技種目の練習や合唱・ダンス練習に励んでくれました。

そして開催当日、生徒は勿論のこと、参加した全ての人の笑い声が小さな小学校に響きわたりました。結果として、今年も中国側、日本側参加者の皆様より非常に有意義で楽しいイベントであったとの評価を頂くことができました。そして今年は、企画から一緒に頑張ってくれた先生方の満足気な笑顔がとても印象に残る「文化体育祭」となりました。



参加者、父兄全員で記念撮影

来年も是非何らかの形で「第4回文化体育祭」を実

施し、そして多くの方に参加していただけたらと願っています。(JOCV H17 シニア、増田宮子隊員、涼山州赤十字会配属)

(4)協力隊の教え子とJICA事務所関係者との親善野球試合開催!

前日までのギラギラした暑さがちょっと緩み、そよぐ風も心地よく感じた 6 月 2 日(土)の午後、現在河北省保定市の保定第 4 中学で野球を指導している JOCV の八田学隊員の教え子である同中学の中学生と JICA 中国事務員や専門家、大使館員などとの親善試合が、北京市郊外のシマックス・スタジアムで開催されました。

今回の試合は、もともと来る 7 月に予定されている河北省内でのリーグ戦に備えて、野球の試合感覚を身に着けることを目的として、先に日本人学校野球サークルチームとの試合が企画されたのですが、せっかくの機会ということで JICA 事務所との試合も企画されました。中国ではまだまだ野球をプレーする人が少ないため、1 試合でも多く試合を経験したいというのが保定第 4 中学側の事情でしたので、話はとんとん拍子に進んでいきました。

試合当日は、あいにく前日降った夕立の影響か、グラウンドの地面は、初め一部湿っていましたが、試合が進むにつれ地面も乾き、追いつ追われつの熱戦が繰り上げられました。



最終的には若さが勝り、18 対 8 で保定第 4 中学が圧勝しましたが、事務所員たちも久しぶりの野球の試合について一生懸命になりすぎてしまい、翌日には筋肉痛に悩まされた人も多かったようです。

なお、試合後は、古賀所長から保定第 4 中学に記念のグローブが 3 点贈呈されました。また、ホームラン 2 本を打ちながらピッチャーとしても活躍したキャプテンの許跃(シュー・ユエ)君には MVP として記念のバットが贈呈されました。

当日の夕方には北京市内でささやかな打ち上げ大会

を実施しましたが、平均身長が優に 175cm を超えている保定第 4 中学の面々の食欲はかなりのものでした。

翌 6 月 3 日(日)午前には、日本人学校野球サークルチームと、午後には北京市 101 中学野球チームとの試合が行われました。対日本人学校チームでは、15 対 3 と圧勝しましたが、さすがに疲れたのか、午後は逆に大差で負けてしまったようです。

今回は、是非 JICA 事務所関係者が保定市に遠征して、今度こそ勝ちたいものです!

なお、今回の試合実施に当たっては、シマックス・スタジアム運営機構様と龍頭公寓の皆様にご多大なご協力をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。



2. 主な調査団(派遣中・派遣予定)(5月)

なし

3. 5月の主要行事

5/8 JOCV 短期隊員赴任(四川省涼山州)

5/25 プロジェクト調整員会議

4. 専門家・ボランティアコーナー

今月は、内蒙古自治区で活動している中川雅理隊員(日本語教師)からの投稿をご紹介します。

(1) 日本語教師と砂漠

はじめまして、18 年度 2 次隊の中川雅理です。現在、内モンゴル自治区フフホト市にある内蒙古大学で日本語を教えています。中国に来て 4 ヶ月、生活にも授業にもようやく慣れてきました。



さて、赴任して3ヶ月が過ぎた直後、4月13日から4日間、私は内モンゴルのオルドスへ行ってきました。目的は砂漠での植林活動です。思えば協力隊の面接試験で志望動機を聞かれた時、私はこう言いました。「開発途上国の抱えている問題を学生と一緒に考えたいんです。」あの時はただ漠然と、そう考えていました。「とは言っても日本語教師に何ができる？」と何度も自問しましたが、答えは見つかりませんでした。

あれから1年以上経った今、私は中国の内モンゴルにいます。内モンゴルといえば、青く美しい草原ですが、しかし、その自慢の草原は中国の発展・開発の犠牲となり、どんどん砂漠と化しているのです。砂漠問題は内モンゴルの深刻な環境問題です。年々砂漠は広がり、なんと北京に近づいているそうです。それを阻止し、何もないところから何かを生み出せるころに変えるべく、私たち協力隊員の先輩である坂本さん(訓練所で使った教科書に出てくる、あの彼女のいる大谷さんを羨ましがっていたバンベンさんです!)は毎年オルドスへやってきては植林活動をなさっています。目標は10年間で6000ヘクタール!今回は第4回目で、私も参加してきました。

13日、同じフフホト市内で活動している先輩隊員のMさんと二人で出発。バスで7時間ほどかかりました。その間、初めての「ニーハオトイレ」に小さなダメージを受けたりもしましたが、無事にオルドスへ到着しました。夜には、現地の林業局の方々の熱烈な歓迎を受け、オルドス式で1人から3杯ずつ白酒が注がれました。「天に感謝して、地に感謝して、人に感謝する。」だから3杯です。頑張ってしまった私はフラフラで部屋に戻りました。



若干二日酔いのまま、翌日は目的の植林でした。ホテルを出ては最初の30分は道が舗装されています。長〜い1本道で、右も左も何にもない。ただ、全く生き生きしていない草がたくさん生えていました。一応草原らしく、夏には緑になってきれいさう。それから徐々にコンクリートがなくなり、砂の道になります。荒地にも関わらず運転手さんはスピードを落とさないため、バスはジェットコースターと化していました!ポンポンとお尻が浮き、同期のFさんは座席から滑り落ちていました。

人生初の砂漠!!きれーい☆感動〜★

これが最初の感想です。砂漠を減らすために行ったのに矛盾していました。そして植林開始です。はじめは芝を植えました。表面はさらさらでしたが、少し掘ると中は水気があるので、ちゃんと育つのださうです。芝が終わると次はポプラの木です。近くでは以前植えられたポプラの木がすくすくと育っています。私たちの植えた木もいつかこうなるんだなと思ったら、とてもうれしくなりました。途中雨が降ってきましたが、現地の人たちは手を止めようとはしません。自分たちの土地を自分たちで守るんだという彼らの熱意を感じました。午後2時ごろ昼食(絵菜)をとり、また、初めて自然の中でのトイレも経験しました。開放的で意外と気持ちよかったです!

3日目は砂漠ウォッチングの予定でしたが、砂嵐がひどかったため、バスを引き返しました。途中、タイヤが砂に埋もれてしまうというハプニングがあり、みんなで力を合わせてバスを押ししました。それもいい思い出です。



4日目の朝、オルドスを出発してフフホトへ帰って来ました。そして、植林後の授業では、砂漠問題を取り上げてみました。砂漠問題とはどんな問題か、どうして起こるのか、誰が困るのか、どうしたら解決できるかなどを、学生同士で話し合ってもらいました。もちろん日本語です！あのとき面接で、学生と一緒に考えたいと言ったのはこういうことだったのかもしれないと思いました。砂漠だけじゃなく、他にもたくさん問題があります。残された時間で、どれだけのことができるかわからないけれど、学生に問いかけて、一緒に考えていきたいと思っています。(JOCV 18-2 中川雅理隊員、内蒙古大学配属)

*。専門家、ボランティアの方々からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所 周南 (zhounan.cn@jica.go.jp)あてにお願いいたします。